WASON
HQ
1104
J74+

Dec. 8
1885
no. 10

驛遞局認可
明治十八年十二月八日發行

女學雜誌

第拾號

東京萬春堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

淺岡 君が爲めつくせ心は淺岡乃松の操におよばざるらん

●女學雜誌第拾號目次

華族女學校規則●時事新報の娼妓論●雜報數件●食物の話●和歌三首。詩二首●右大將道綱母の話●明治十八年觀古美術會の記。加茂眞淵翁りヨ子をいふまれし文。好對句を得たり。筆鉾と吾方へ屆せよ。短慮を戒しむ●飮食の心得。淨瑠璃の評●小野小町。文七元結。人に初めて逢たる時の心得。人に物事を頼まるゝ時の心得。朝鮮女官。紫式部の才。入婚禮のこと。中人のこと。慶安のこと●全國女敎師の數●諸廣告

十二月八日

明治十八年間女學雜誌發兌日表

七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
廿日	十日	十日	十日	十日	八日
	二十五日	二十五日	二十五日	二十五日	二十日

廣告正價表

一行一回掲出	但廿三字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖とも事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵税共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但之不得已者に限り一錢切手一割增にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表

一冊	正價四錢	郵税一錢	合計現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計前金壹圓卅錢

但之毎號十冊以上づゝ取纒めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

劔持登喜子

頃は慶應四年の四月劔持廣之進と云へる者脱兵隊の長となり奥州白川表に至り大に武勇を現はせしが二本松の落城に其身は遂に戰死せり時に妻女の登喜子なる二拾二才の麗顏も丈夫に劣らぬ膽勇あり夫の討死聞くよりも銃丸冐し戰地に向ひ死骸は積んで丘をなし血は流れて河をなす修羅の巷をもとゝもせず彼方此方に馳廻り夫の屍を見出して脊に引掛け優〱と立歸りたる有樣は婦女子に似氣なき働きと敵も味方も賞せしとかや

女學雜誌第拾號　（明治十八年十二月八日）

●宮內省達華族女學校規則（前号のつゞき）

第六章　缺席●第一條　凡生徒は妄りに缺席するを許さず●第二條　病氣或は他の事故に依り已むを得ず缺席する者ハ即日其保證人若くハ後見人より屆け出づべし但し病氣缺席一週間以上に亘る時ハ更に醫師の診斷書を添へて屆け出づべし●第三條　事故ありて三日以上引續き昇校時限に後るゝ時も保證人或ハ後見人より屆け出づべし●第四條　放課時限に先ち退校せざるを得ざる事故ある時も其都度保證人或ハ後見人より屆ケ出づべし●第七章　生徒心得●第一條、本校の生徒たる者も常に、皇后宮の盛旨を服膺し心を正しく行を勵まし温良貞淑の女德を養成せん事を勉むべし●第二條　本校に在て學業を勤むる者も他日夫に配してハ良妻たるべく子を得てハ賢母たるべく父母舅姑に事へて孝順の子婦たるべく奴婢僕隷に臨みては温良慈惠の內君たるべく畢竟貴族女子の資質を完備せんが爲めなれバ虛文に馳せず空想に流れず專ら應用の道を索むべし●第三條　身體も才智を貯ふるの器にして德行を載するの車ともいふべき者なれバ常に飲食を節し肌膚を清潔にし運動を適度にする等凡て攝養の道を守りて氣力を壯健にせん事を勉むべし●第四條　毎日の課業を怠ることなく教場の出入は必ず其時を守り教場に在ては別して容儀を正しくし擧動を整肅になすべし●第五條　長上師友に對しても殊に禮讓を厚くし信義を重んじ又堅く學校の規則及び教誡を守るべし●第八章　授業料●第一條　授業料は一ヶ月金一圓より三圓迄とす●第二條　授業料ハ六月十二月の二度に分ち之を納附すべし其新に入學したる者も亦入學許可の日ゟ月數を算して納附すべし●第三條　課業を缺又ハ退學せる者有も既納の授業料ハ返付せざる者とす（畢）

○時事新報の娼妓論

慷慨憂世の体を装ふて只だ世を驚かすべき奇論を發せんとを勉る者は時事新報なりその報告の新たなるその編集の勉めたる以て世に利する所ろ固より尠からずと云へども其の所云る社說なるものに至りてハ常に假面侮世の主義を唱へて世上の道義を破り以て世を毒害するの不利は反て其の少か人心を激昂するの小利に及ばず大凡そ世民の道義を進捗せんと欲する者は皆な此の新聞を目して道德の破壞者と爲すと固より其の故なきにあらざる也近來品行論あるものを日々の紙上に掲げて世人の品行を論規する所ろを見るに均しく亦た常例の句調にして其の品行を高ふせんとする所の論議は反て亦た世の道義に大害するの言に非るハなし殊に其の娼妓を論じて親鸞日蓮の徒に比較するに至りてハ吾人覺ゑず紙を裂きて其の見識の惡むべきに忿怒したり嗚呼時事新報の記者は曾て婦人論を草して日本婦人の不幸を憐れみ男尊女卑の弊風を破壞して女權の擴張に熱心を表したる所の人物なり然るを今まハ亦た日本婦人の獸類に均しき境界に陷りて動物社界の下に墜落したるを憂へず反て之を賞賛するの實を表はるに至りてハ吾人たゞ其志しの下卑なるを愍むと共に日本上流の記者社會中如此き下等人物の逍遙するに慷慨せざる可らず吾人は娼妓を全廢して世の道德を維持し以て女流の自由を擴張せんと欲はるものなり如此き明白の理論にに對してハ別に細密の解釋を要せざるべしと覺悟したりと云へども既に世に如此き存娼論あらん限りは向后再び大論を草して堂々娼妓の全廢論を主張すべし今まただ其の序論として時事新報記者の所論は前后に矛盾し始終に反對し到底ろの論議自身を以てぶもよく生存し得べき者にあらざるとを明白にすべし此れ盖し如此き妄論を破壞するの最良主段ならん

記者は婦人論中に於て今の婦女教育を盆栽松の培養に比較し向后婦人の情慾をして男子に於けるが如く自由ならしめずんバ决してその身躰を壯健にし其の性質を活潑にし以て眞正なる發達を得せしむる能ハずと云へり蓋し男子に限りて其の放逸を容るし婦女に於てハ嚴に之を制するの理由なしと云ふなり而して今回の品行論第六に云ふ所を見れバ若し娼妓を廢して男子の獸慾を發せしむべき場所を滅しなば婬奔密通、强姦、勾引、欠落、爭鬪等となり社會の秩序も之が爲に紊乱すべきを以て止を得ず娼妓を存し男子の獸慾を滿たすの場所を備へざる可らずと云へり故に此の兩主義を同日に論ずるときは

日本婦人の情慾を更に自由に發達せしめて以て其の性質を活潑にし其の自由を伸張せしむるの忠告いよ〳〵世に行れるゝとゝなり婦人の情慾實際更に强く發達するとゝなれりしならバ之が爲に其の情慾を滿たさしむべき男女郎を備へ新吉原中別に女客を待すべき一境界を設置せざる可らず

此事はたゞに記者の憂ふる所にあらざるハ勿論其の議論の世に行れれたる決果として必らず大滿足すべき筈あるべし故に時事新報の記者は世に男女郎の存在を喜び亦た娼妓の存在を止を得ざるとゝする者なるべし

亦た品行論第六に於て云へらく文明開化次第に進歩するに隨て世に獨身者の數を增し其の始末ハ誠に當惑の次第にして唯一線の血路ハ窮策にも醜策にも娼妓に依頼して社會の安寧を保つの外あらずと蓋し世次第に進みて男子東西に漂歴するとゝならバ止を得ず妻をめとる者少きが故に勢ひ娼妓に依りて其の獸慾を滿たしめざる可らずと云ふなり

然れども世に若し獨身の男子あらバ亦た一方に獨身の婦女あらざる可らず如此き獨身の婦女をして其

獸慾を滿さしめんにハ亦た止を得ず男女郎を設くるの制に委頼せざる可らざらん

故に此點に係る記者の論議より推すも時事新報の記者は亦た世に男女郎なるものゝ設けられんとを主張するなるべし

其他記者の論議は大抵皆な自殺の理論なり若し細密に之を吟味し且つ其の決果を類推せバ其の決果や實に不測の害毒を世に流行そべきならん記者もし眞に世を憂へバ希くは少しく放言を愼しみて正實の論を爲すべし吾人は日本婦女の自由を主張すと認定されたるものにして今ま亦た如此き暴論を吐くことあるを思ひて共に女權の擴張に盡力すべきものなきとを歎するなり嗚呼眞正に日本婦女の爲に慷慨し眞正に日本の女權を擴張せんとするものハそれ果して誰れぞや

●華族女學校　前号ハ記載せし同校開校式に付　行

啓の碑谷校長の朗讀されし祝詞の趣意は左の如し

恭しく惟みるに陰陽は天地の大道なり夫婦ハ人倫の大本なり故に陰陽和せざれバ寒暑時ならず五穀稔らず夫婦和せざれバ家道敗れて子孫狂愚是れ自然の數なり昔人云へるあり天地の大も端を夫婦に成すと夫婦の任亦大なり豈一ハ重く一ハ輕く一は敎ありて一は敎なくして可ならんや本邦の女子婉麗靜淑天質美なりと雖とも敎育の法未だ備はらず猶璞の磨かざるが如し之を男子の切磋琢磨し以て才智を發揮し德性を涵養せる者に比せバ權衡宜しきを得ず是を大道を得大本を全ふする者と云べけんや維新以來學事日に盛んに風化月に進む而して女子敎育の道亦欝然として興れり先に東京女子師範校の設けありしより各縣相次で興る今又た聰明婉淑なる　皇后宮女子敎育の治道に切要なるを深く感せさせられ本校の設けあり經營已に成り生

徒雲の如し畏こくも本日を卜し　臨御ありて開校の式を擧行せられ且つ　聖諭を賜はる嗚呼　聖慮の深遠なる　聖恩の優渥なる斯の如し生徒たる者益々勉强苦學して智を磨き徳を養ひ家にありては孝子淑女と呼れ嫁しては良婦貞女と稱せられ家道を治めて以て兒女を敎育し良人を助けて以て其の缺漏を補なハゞ乃ち陰陽調理夫婦唱和實に是れ文明の極君子の國と云ふべし謹んで前途の成果を豫言して祝詞を奉る云々

又た敎師惣代下田歌子の祝詞の趣旨ハ左の如し

萬の物みな改め行く、此めでたき大御代にあひ奉つりて、あはれ何業か進まざらん、特に此物習ひの道よ、あまねき大御惠の露かゝらぬくまもなく、大中小の學校よ行かふ人、年々三百万をもこゆとなん、此道のさかは斯の如くはあれど、猶女子の敎をと、おぼして、　皇后の宮は今日此式場に臨ませ給ひて、更にかしこき大御詞をさへ給はせたる、古へよ今よ聞も知らぬ、例ふにそは、歌子等つゝしみて、古の跡を思ひ侍るに、嵯峨帝の皇后、橘氏の爲お學館院をたてさせ給ひしすら、いみじき大御心ぞとハ、後の世までいひ傳へて類ひなき、例にいひいづるを、況て斯廣〳〵しき、遠く施したまハん、大御心を、誰しの人か仰がざらん歌子　らのたしけなく、あへる大御代に生れあいて、今日の此ことにあひぬる、嬉しさハ、何事にかよそへ侍るべき、いかで今より今日の仰せごとを光よして、くゝき道をも明らめ、賢母は國の幸福を生むといへることわりをおして、まことの道に導き侍るべく、はた、此母たるものハ、ひとり女子の母たるのみに非ず、御政事にも預り、御軍にも從ふ、男子の母とも成りぬべきあれバ、其道〳〵のあらましをも、大方はしらしむべく、且何くれの學科も、よく其法則を定

めて、深き意をもきはめしむべし、今此式場にさふらひて、めでたき御有様を、み奉つるかしこさに、衆教員にかはりて斯も聞えあげ奉つるにてそあなかしこ

又た生徒總代近衛衍子の祝詞の趣旨も左の如し

このたび、きさいの宮も、大みやのかたへより、このいとめでたき學校を開かせられたまひき、さるもふみのはやしの、ものふかうしづかなるべき、女子のみちを、敎へみちびかせたまもんの、大きなるこころなるべしかし、けふしもそはじめての日とて、おほんみづから、またらせたまひて開校のしきを行もせたまふを、おそれたれくのひともかも、よろこばざるべき、衍らをそはじめて、このときまうまれあひてこのむしろにさふらふものは、いたつきとめて、久かたの月のかつらを、折えてぐにも、みちある御代のひかりをかゞやかして、みめぐみのちゞのひとつにもと、思ひたまふるまゝに衍等身のつたなきをもてすれて、同じともがき、なべてにかはりて、かしこき大前に、きこえあげん、ことはぎまつるになんあなかしこ

●婦人慈善會設立の計畫　府下有名の紳商達に今度一の婦人慈善會を設立せんとて目下頻りに計畫中なるよし聞く所に據れば在來の婦人慈善會も貴顯の婦人のみを以て組織しあれば自から別社會をなし高尙に過ぎて物品購求者も多少遠慮に思ふの情狀なきにあらず且つ物品も廉にあらず故に新に奏任官及び紳商の夫人令孃又は府下有名の藝妓等を以て別に一會を設立して物品を廉價に販賣する時ハ中人以下も出て購求するを得べく頗ぶる便利ならんとの主意に出たる者のよしなるが利潤は矢張り養育院其他貧民に施與するとのことなり

●常盤の墓　表にハ源家女常盤墓とし其裏にハ忠信

建とあり石材ハ白川石にて年號ハ確と分らねど前の文字ハ明かにして其墓の下に懐劍其他の品が埋てありしを此頃ろ見出したるハ西京愛宕郡紫竹大門村にて農家藤原某の持地うちなりしが是迄常盤御前の塋とて人の知りしハ京都府葛野郡常盤村なりしが右は定めし常盤村といふ名により同村内へ何人か墓を設けるものならんが何にも紫竹大門村の方の墓ぞ古くして正しきものなるべしと思はるゝと同地の某氏より報知あり

●束髪の新歌　大坂よてハ束髪が大流行となりしより今度角の芝居にて市川右團次と中村鴈次郎の出に謳ふ新作の束ね髪といふ歌ハ左の如しといへり

（本調子）

すきあげし柳の糸の洗ひ髪、春ならねども翠して目にふつてかゝり氷ぎわの合氷の流のよどみなくさつとひらけて、さバけて見れバ、愚痴やりんきハ昔の事よ合今ハとけたる胸と胸、嬉しい中の約束も、實と誠のすぢたてゝ、名も三組の末ながく合丸うむすぶや束髪

○食物のはなし　（前號のつゞき）

權大僧都宣慶といふ僧ハ身を塵外に置ながら最も俗事に委しく且器用にして書畫ハ勿論手先にて爲る事ハ何にても人の及バぬ程なりしが取分け料理の事に妙を得て自ら食物説といふて記されたるうちに左の件あり

凡食物ハ人間に在りて老若男女ともに日に三度ハ欠べからず鳥獸虫魚總て生とし生る者ハ之を一日も欠ざる大切の物なれども何故にや人間ハ食物に心を用ひず男子ハ食物を女の管どるとのみ思ひ君子ハ庖厨を遠くる抔と澄せど獨身の儒者が小鍋立をなし出家ハ殊よ度外に置ども禪家にハ自然食物調理を一の學科中に置ごとく出家とて生米を嚙み生大根を喰ふ

譯にハ成りがたし去る程に男女とも一ト通ハ食物調理の事を心得たきものなり況や女ハ是ガ一役なりあれども並の者ハ迚も旨き味を出すハ叶ひ難し旨き物ハ料理人の手ならでハ出來るものに非ずと度外に置き百色に遣へる豆腐すら僅に奴、冷奴、湯豆腐、豆腐の露ぐらゐしか料理する事を知らず八杯豆腐杯ハ切る法をも辨へず夫も一日ハ鹽からく一日ハ惡る甘く己れが口にだに適せずまして人の口に適するハ到底能ハざるを常とす何と歎ハしき次第ならずや拙僧の思ふに是ハ全く横着より起れるものにして名を下せバ婦人の陰罪なり如何となれバ衣類ハ人の目につきて粗末の仕立ハ笑ハれなんと思ふにより必竟他人の爲に注意するが食物ハ家内のみ味ひ家族のみ知りて口へ押込む上ハ他人の見て何を喰しかを知れぬものなれバ此油斷よりして自然に不注意を來たすものなり中に食ハ咽喉を過るを以て足ると偏に悟りがましき者あれども否々左に非ず何程悟りを開きても心中ハ旨き物を好み命ハ長からんと欲するものなり此命の長を欲すれバ最も食物に心を用ひ俗人ハ魚や肉類を旨くして食するが宜し殊に子供を擧くる者ハ夫婦とも大根や芋バかり食てハ丈夫の子供と得られぬあり出家ハ子供に心なけれバ野菜等にても宜けれど俗人ハ迚も躰ハ續かぬものなり如此に大切の食物を料理する役と勤とする婦人ハ少時も心に怠る事なく明日の汁や菜ハ今日計畫し夏の日にありて冬の貯へ物に心を用ひ又炭薪の入用を省く工夫と鹽加減とハ最も考へを凝し總ての物を腐らせぬ様に繰廻し我身ハ少々不足にても奉公人等にハ滿足に思ハるゝ様に食物を宛行ハ家内繁榮の祈禱あり又子供の食ハ度を過させて病身にする事あり之を制して他の物を欲がる賤しき根生を生ぜさする事あり此賤しき根性ハ賊の根元ぞなれバ至つて注意のむづかしきものなり又

老人ハ食物を最上の樂みとする故に食より病を起す事多く兎角腐敗の物を勿体なしとて食する事あれバ是にも氣をつけて防ぐべしと在家の樣を倩々見て記し置きぬ　東叡山松林院主宣慶（をはり）

○五月雨　磐城棚倉　鈴木丸女

八重にふる五月の雨の永き日を
　文しよまずハいかに暮さん

○夏　夜　常陸　伊藤いさ女

夏の夜ハぬるともなしに明ゆきて
　またりもはてぬ夢の浮き橋

○鶯　東京　稲村千町

汝がためにうゑし梢の花さきぬ
　ひと日もれちず來なけ鶯

○寄閨秀諸子求高和　磐城　蘆野明日香

育兒任重在其身。勸學須期爲好人。休道前途猶萬里。
人間不保百年春。

評　警意懇到。不翅女子。

○暮春客居五首録一　伊勢　山崎孝

南窓雨歇淡煙籠。門外無人水自東。黃鳥如悲春色盡。
聲々啼入落花中。

評　暮春風景。宛然如見。

○右大將道綱母の話

道綱の母ハ藤原倫寧のむすめなり東三條の攝政兼家公天曆八年の比ハまだ兵衛佐といふ輕き御身にてありける時此倫寧のむすめのもとへ通ひたまひて度々歌をよみかはされしが明る年の八月廿日に道綱を生みたまひしかバほどなく兼家公の北の方となりたまへり兼家公のしのびて通ひたまひしやとの歌などをかきあつめて蜻蛉日記と名づけられたるもすなはち此道綱の母の作なり其日記にハ天曆八年より後天延二年までおよそ廿年バかりの事もあり扨彼日記の天曆九年の所に十月の末に三夜バかり打つゞきて兼家

公のおほせざりしと有て曉がたに門を叩く音せし故おほせしにやと思はれたれど此程は外に通はせたまふ所のおかげなればわざと門を明たまはざれバ定めて例の所へおはしけんと思ひ居たまひけきど翌る朝になりて　なげきつゝひとりぬるよの明るまはいかに久しきものとかはしる　とよみてはいつものふみより引つくろひてうつろひたる菊の花にさしてやりたまひしかバ兼家公の返事に夜前そなたへまいりたれど門を明たまはざる故夜は明るまで立て待べしと思ひつれど禁裏より御使ひたまはりたれバよんどころなく歸りぬ外にて明せしにやとうたがはるゝもむべなる事ながらあどかきて彼うたのかへしに　げにやげに冬の夜ならぬ槇の戸もおそく明るはわびしかりけり　これは彼女君のうたにひとりねをしてよの明るを待はいかほど久しきものとおぼしめさるぞとよみたまへるをうけてまことにそなたの申さるゝ冬の夜の明るを待間は久しきものにてあらんかその冬のよまでもあらぬ槇の板戸も遅く明るを待はくるしきものにて有けりといふ心あり扨此なげきつゝの歌の事書を後拾遺集には其夜の贈答のやうにかきたれどかげろふの日記をみれば翌朝の贈答あり又兼家公の御事を後拾遺には入道攝政と書き大鏡には大入道殿とかけるはいづれも後の稱号を書たるものにて此女君にかよひたまひし時はまだ右兵衛佐と申せし程の事なり又顯昭の色葉抄に道綱母を本朝三美人の中の一人といへり又兼家公夫婦の御事ならびに御子道綱卿の事どもは彼蜻蛉日記と大鏡とにくはしければこゝにもらしつ

○　右大將道綱母

なげきつゝひとりぬるよの明るまは
いかにひさしきものとかはしる

拾遺集戀四に入道攝政まかりたりけるに門をおそ

く明ければ立わづらひぬといひいれて侍りければよみて出しけるとあり此ことがきハ入道攝政兼家公わかゝりし時此御かたへかよひたまひけるにある夜門を遲く明られけれハ兼家公の詞ハ先ほどより門の外に立わづらひたるぞと内へいひいれさせたまひければ内よりよみて出されたる歌あり歌のこゝろは門を明るあひだの遲きをさへさやうに仰せらるゝかわらずがちなげきつゝしてひとりねる夜の其夜あけまでのあひだはいかほど久しく待遠なるものぞとおぼしめすぞといふこゝろなりなげくはためいきをつくことなり

○明治十八年觀古美術會の記

明治女學校の一女史

十月十八日空少し曇りされど休暇なればまたしき友ひとりふたりとゝもに築地本願寺なる龍池會に行ぬ門前にハ車馬所せきまでつどひたりやがており立て進みいるに家ハうちいとくらきにみる人ハおほくあつまれり古人の筆の跡およハぬめにハわきがたくたまく其名の聞しれるがあるのミのくてれそかへりてハ家尊いろ〳〵にいかゞ語らんと思ふ折からひげいと白く生たる老人の連もありげなるがみて行くさま何となくよのつねあらずうならずものしれる人ならんと思へバうしろめざきやうなれど其しりにつきてひそかに行に翁ハかくともしらぬや有りけん連なる人にさし示すとく〳〵にとおもしろく嬉くて行中に宮内省の御物なる紀朝臣の何々(品を忘れたるなり)行成卿の古今集定家卿の更科日記などをつらねたり御物なればまさしき品なるべし師の君をおどていざあらざりけんいと殘りをしなどひそかに語り合ふを彼翁ハみゝへりて君達ハ先よりよくみる事よと言れていとつゝましければ初めよりの事を語に翁ハほゝゑみて此畫幅のうち探幽ハ狩野家の尤も上手の聞え高

えた人あり筆の勢ひ墨色などをよく味ふべきなり眞の日本書といふは土佐家なれど是亦筆づかひの細やかなるいづれも名ある人の筆の跡はわれ〳〵のめにもいちじるしく他にすぐれてみゆるありなど示さるゝによき家づとを得たる心地して翁に謝せんとすればはやいづれへ行けんみえずなりぬ誠に千歳もくちざるものは筆の跡なりまた其見ごのさきものをかくみるも此大御代の光りよこそ

○加茂眞淵翁のりよ子をいたまれし文

賀茂眞淵縣主は遠江國敷智郡伊場村の百姓の子なり濱松の宿の本陣梅谷市左衛門が養子となられしがゆゑありてそこを去つひに東都にくだりて荷田東麿宿禰の學風をひらかれしとなんりよ子をいたまれし文は家集にもれたればこゝにあぐ

それ人は久かたのあめにはらまれてあらがねの地に生れ且わが國人は天つ神地つ神たちのすゑならぬはなしうつせみの世にあるほど幸有はあめと高く幸なきはつちといやしきのみ也こゝに玉まかれる人あり名をばりよ女とぞいひける此人の遠つおやく野原のそれがしは物のふにてなん有しをいかに幸やなかりけん父はゝは名もきこえでなん終にたる此人は若きほどにおほ名ある家につかへたりけるをやからのいふがまに〳〵ある人のめと成てをみなとをのこゝうめりそれゝち夫の身まかりよたればやがら又にゝむれど二たび人のめとならんとおもはずたゞ此子どもをひたし立てとやつ祖の跡をおこさんとのみねぎけりさるまゝよし有てそのこゝろざしをそれよ傳ふわれその心をめでうべなへりければやがてうなゐ子を携て來れりそれより後はまがよろづのことわざを助てまめ心をなすと十とせまりみとせになりぬさる間にろの子生立にければ家おこしぬべき道を學ばするよ成ぬべ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しと師もいふを聞て年月に始てよろこべる色あり然るを今年寶暦六のとし五月ハのりより此人病あつしく侍れハわれ天地のすめ神たちにねぎ都の藥師と撰つゝ心のかぎりつくすとすれど終に此神無月中の一日に四十餘六を限としてなん玉さりにけるこそかなしけれ抑此人ハ心高くして清く物をわいざめしのべりふなずゑのわざに堪てはたみやびかなることをねがへりあらぬ草のめどいへどもまそらをのはじぬべき心のみ有ける物をいかなれハ世に幸なくして終にまかりにけん身にとある設のよろひなく袋におくせるものもなしふゝのこれるものとハかたみの子とことのも也けりそのことのはいわが家のふみに載たれば後見ん人忍ぬべしその子もわれ老てわすをたのめすといへど猶またさよ末のふづきを定むべしさらバもとよりのねぎごとハなりぬとしておもひ明らめ聞こらし給へそれ人ハ天地のあしのまに〳〵なれハ終よ天地にかへることわりを知てなき玉ハ中々に安かりなんたゞのあしき物ハしバし此うつせみの世ゐふる人なりけりまことを盡してまかれる名ごりの老が身にしみぬるハいつまでの齡ありてわそれんやとそのこゝろざしのかたへをざみ長く引わかるゝ柩の前にたゝへんとするにいはまくもかなしくうけまくも泪にむせぶのみ

こはそのなげきの中に書出られし草稿のまゝなれどいふかしきふしも見ゆれどもそれハそれとしてさながらにうつせる也

○好對句を得たり

史館老話に曰く楠正通闘東下向のとき近江の湖を眺て一句を得て蒼波路遠雲千里と此對句を賦せんと按じ煩ふ趣向うちばた道すがら意を碎き箱根山に至りし時に正通が娘歌と詠じて　道遠く雲井見るべき

深山路にまよひても聞ぬ鳥の一聲　正通是を聞たちまち對句を得て曰く白雲山深鳥一聲と右のあと十訓抄著聞集江談抄等よ見ゑたり嵯峨の釋迦を取來りし奝然といふ僧入宋して此句を吾が作とて鳥一聲を虫一聲雲千里を霞千里と直して見せければ宋人曰く甚可なりとしむらくハ虫を鳥とし霞を雲とせられバいよ〱可ならんと云ひしとぞ

○筆鋒を吾方へ屈せよ

釋東湖云ふ總て物のゝんとおもハゞ筆を直にするを第一とすたゞ直ならん事を欲すれど必ずゆがむわらかじめ筆鋒をして吾方へ屈するやうにすべし試に年川の字等を書に屈する心にて筆を用うればゆがまず余まれを馬氏の言に聞けり

○短慮を戒しむ　西讃　森長見述

一にハ後悔あり二にハ物ぐるし三にハ其恩わらそる四にハ智ある人親しまず五にハ他人に仇の思ひをなす六にハ器を減ず七にハ病を生ず八にハ爭ひ多し九よハ苦勞多し十にハ衆惡とつす尙は此外にも失多し右其の概ねを擧るのみ

○飲食の心得（前號のつゞき）

●飯の食ひ樣　右の手よ箸を持ちあがら椀を押へ左の拇指を少し椀の緣に掛け餘の四指ふていと底の邊を持ち飯をバ始めて二箸程二度目より三箸程づゝ食すべし但し三の膳まで出たとき蓋の取り樣ハ右の手にて蓋と取り左の手に移し膳の左の方よ仰むけて置くべし尤も左の方の物ハ左の手にて取り右の手を添へて取り直し下に置き右の方の物ハ右の手にて取るべし樣体ハ前に同じ蓋を取るの順序ハ飯汁平二の汁壺と心得べし●汁の吸ひ樣　吸物に同じ●廻り物食ひ樣　飯に汁再び飯に汁を食し次よ平を食し亞よ鱠を食し次に二の汁亞よ壺次よ猪口亞に燒物と云ふ順に食すべし都て平より燒物に至り一巡食ふるまでハ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

飯に汁を食する樣にして後ち廻りの物を食すべし一巡終りて後ちハ心まかせに何品なりとも食すべし然れども菜より直ぐに菜へ移り食すべからず必らず飯を食し次に廻りの物と食すべし　（をはり）

○淨瑠璃の評（前號に續く）

また長唄のよき原雀に凡いけるを放つと光正天皇の御宇かとよ養老四年季の秋諸國に始まる放生會といへる光正天皇ハ元正天皇をいつのほどよりかよそあやまりて唄ひひがめけんそれともあれ作者あづかるべきことかは養老四年季の秋といへるはかゝる唄ひものにもさすがに神事の原始をいふとの正しかるとよとおもはれたりそれ宇佐宮にて始めて放生會を行はるゝよしは宇佐宮緣起に養老四年九月征夷の事あり大隅日向兩國亂逆す公家宇佐宮に祈請すその禰宜辛島勝波豆米神軍を相率て行て彼國を征し其敵を討ち平ぐ大御神託宣して日　合戰の間多く殺生を致す宜く放生會を修すべく者諸國の放生會この時より始れりとありさるを清元のながれをくむものゝ唄ふを聞くに養老四年中の秋といへるといかにぞや石清水に勸請し奉りし後こそ八月十五日なれ諸國にはじまるといふにも心づかでなまじひに改めたるとよそいと拙くおぼえたり何とにもあれふるきに人の書おけるをあらためんにハ心すべきとぞかし　（完）

○花木を瓶に生る法

凡そ花木を瓶に生る法山茶花の葉の中へ鹽を入るれば花落ず萍蓬ハ根を四ツに割て山椒一粒を挿めバ二三日保つ牡丹芍藥ハ根を熱灰に燒く竹ハ中心を通して筒中に水を充れバ久しきにたも中心に水氣の到りかぬる草ハ紙撚を中へ通して能く水を引上ぐるといへり

○小野小町

篁の二男出羽守良眞の女小野小町少して色を好みし

時もてはやされし有様ならび無かりしかバ衣に錦繍をかさね食にハ海陸の珍を調へ身にも蘭麝を薫じ口にハ和歌を詠じよろづの男を賤くのみ思ひ女御后に心を懸けりしに十七にて母におくれ十九にして父におくれ廿一にて兄に別れ廿三にて弟を失ひしかバ單孤無頼の獨人に成ていみじき榮花日々におとろへて花やかなる形年々にすたれつゝ心懸たるさぐひもなくくのみ有しかバ家ハ破れて月の光空しくすみ庭ハ荒て蓬のみ茂り物事變りける頃ろ文屋康秀が三河丞にて下りけるに誘われて「侘ぬれバみを浮草の根を絶てさそふ水あらバいなんとぞおもふ」と讀て次第〳〵に落ぶれ終にハ野山にさすらへける懐舊の心の中に悔しきこと多かりけんかし詠歌の中に思ひつゝの歌ハ業平を戀て讀り色見えての歌ハ大江の維章が妻となりしがやがて藤原の朝行が聟にありけるをうらみて讀るものなり又た玉造と云ふ書ハ小町が事を

弘法大師のかゝせ玉へるといへども大師と小町とハ時代隔りたり大師入定の後に小町ハ盛なれバ大師の筆にあらぬこと明らかなり或説に清行の作といへりまた一説にハ阿部清行歟三善の清行か三善が文法に似たりといへりいづれにも大師にハあらずと知るべし

○文七元結

元ゆひに文七元結とて上品の稱とす俗説にこれハ切元結のことにてふるくハ輪元結のみ長きまゝ綰ねたるを浪華の俠士雁金文七といふもの常にさかり場にていあいし闘諍あれバ生きて再びかへらざるの勇を示さんため元結をもひ切りその死を決せるをあらせしかバ切元結の短かきを文七元結と人みないへるとかやこの説ひがことなり案ずるに紫の一本に永坂の下にて文七髻結とて名物の元結をこしらへるありて文七といへるものゝこしらへ侍るかとたづねければある老人の物語に文七といふハ元結にこしらへる杉原紙

の印の名なりと申されし元結車にてよるなりと見ゆたりく彼俠士の時代よりふるき名目なりこの說を正しとすべし

○人に初めて逢たる時の心得

ある人のいひしハ人と初めて逢たらんとき互ひに心ざまの可否をしらざればうちとく物がたる中にも遠慮がちのみよてるとハゝ朧夜にしらぬ山路をたどるがごとしかくハあれども詞ハ心の花といへバ苟且といひ出る詞の端にすがりて其人の心の可否をしらんと人を識るの第一義なりよき人の詞ハ玉の中の光を探るが如しよからぬ人の詞ハ烏羽の文字をたづぬる心地なるべしよき人としらバむつまじく親しむべしといへり

○人に物事を賴まるゝ時の心得

惣じて人に物事を賴まれたる事を心よく許諾ながらかいやりすてゝ心に思ひかけざるハ男女ともに不信のはなはだしき也初めより我力よ及びがたき事か否やを思案して人の爲によき事ならバ心をつくして取計らふべし及びがたき難事ならバ初めより辭退すべし槇局の詞に人に物事を賴まれ侍らんハ賴み侍る人の善惡をわきまふべし濁江の月のさやけからぬハ月の咎にあらずして詠むる人の恨みハいづきにかあらふんといへり

○朝鮮女官

命婦（我國の宮內省女官に相當に）

內命婦　嬪（典侍に相當す）正一品　貴人（同上）從一品　昭儀（同上）正二品　淑儀（同上）從二品　昭容（權典侍に相當す）正三品　淑容（同上）從三品　昭媛（同上）正四品　淑媛（同上）從四品　○尙宮（掌侍）以下宮人の職に係る　尙儀（同上）正五品　尙服（同上）　尙食（同上）從五品　尙寢（權掌侍）　尙功（同上）正六品　尙正（同上）　尙記（同上）從六品　典賓（我國の命婦以下）　典衣　典膳正七品　典設　典製

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

典言從七品　典贊　典飾　典藥正八品　典燈　典彩　典正從八品　奏宮　奏商　奏角正九品　奏變徵　奏徵奏羽　奏變宮從九品
附世子の宮良娣從二品　良媛從三品　承徽從四品　昭訓從五品　○守閨(以下宮人の職に係る)　守則從六品　掌饌　掌正從七品　掌書　掌縫從八品　掌藏　掌食　掌醫從九品

○紫式部の才

御堂關白道長公の女彰子ハ一條院の后にて後一條朱雀の母后なり歌人にて上東門院と申す承保元年八十七にて崩じ玉ふこの上東門院に仕へし紫式部に今參りの琴引ける女房琴引よしをとなしける名付よと仰有ければいとこにと付たりければことに譽させ玉ひしと也琴柱のさき緒のわたる處をいはこそといへバなりとぞ

○婚禮のこと

婚禮ハ夜する物也されバ古法婚禮の時門外にてかゞり火たくと上臈脂燭をともして迎に出ると舊記にある也男ハ陽也女ハ陰也晝ハ陽他夜ハ陰也女を迎ふる祝儀なる故夜を用うる也唐にても婚禮ハ夜也されば婚の字ハ女へんに昏の字を書也昏ハくらしとよみて日くれのこと也云々貞丈雜記に見ゆ

○中人のこと

婚姻の媒妁する者をなかうどといふハ中人の義なり雙方の中にたちて婚儀をとりむすぶよしの名なり中人をなかうどといへるハ音便なり旅人をたびうど商人をあきうどと云例なりさて朝鮮の訓蒙字會に媒妁俗呼男曰二媒人一女曰二媒婆一總稱二中人一とあり

○慶安のこと

今世にて人の口入するをけいあんといふハ江戸木挽丁に大和慶安と云醫師ありけるにまた同じ頃に伊達三郎兵衛長谷川助右衛門といふ浪人かの慶安と參會し入魂の上にて世間の人の出入あるひハ男女婚姻れ媒妁など右三人して肝煎すしかるにある諸侯の縁邊を取もちその息女金五六千兩持參の筈に相定め彼三人の者どもいひ合せてその中を二十兩ばかりかすめ取たくみを仕たるところに此事世上にあまねくきこえ寛文五年己巳八月廿四日にの三人のやつこらを追ひ放たれぬそのやろの頃よりして人の世話するものを慶安といひけりと諸家深秘錄にいへり

○全國女教師の數（明治十七年一月調）

若宮鉄次郎　投寄

種類	官立	公立	私立	計	男教師百人に對する數
小學校	無	二千六百四十七人	三百二十九人	二千九百七十六人	三人六分四厘
中學校	無	二人	無	二人	二分
高等女學校	九人	二十六人	無	三十五人	百二十八人五分五厘
師範學校	無	四十六人	無	四十六人	七人六分三厘
大學校	無	無	無	無	無
專門學校	二人	二人	無	四人	三分五厘
各種學校	無	六十人	二百二十人	二百八十人	十七人六分九厘
合計	十一人	二千七百八十三人	五百四十九人	三千三百四十三人	三人八分七厘

附言　女教師の總數は女子總人口に比例すれは壹万人に付一人八分四厘の割合なり

大正増補

和譯英辭林再版

●本綴美製本全一冊●豫約價有限特別廉價金壹圓三拾五錢●正價金三圓五十錢

海内無雙特別廉價豫約

●語數凡六萬一千餘言●二行七十六段詰●紙數八百十二ページ●用紙ハ見本ノ紙ヲ以テ調製ス●形體縱八寸餘橫六寸餘厚サ二寸餘●製本脊革金文字入表紙「クロース」總テ原本ノ儘極メテ美ヲ盡ス●豫約期日本年十一月三十日限リ御申込ノ事●成功期日ハ本年十一月三十日限リ豫約者ノ有無ニ不拘出版成功ス●送本期日本年十二月一日ヨリ金圓受領ノ順序ニ依リ遞送ス●爲替金ハ郵便小爲替ヲ以テ御振込ヲ乞但シ銀行爲替現金送リハ御隨意但郵便切手代用一割増シ●該書ハ曩ニ當書房ニ於テ豫約出版シ普ク江湖諸君ノ高評ヲ得僅々二ケ月ヲ經ズシテ一千部ノ多キヲ鬻ギタリ猶爾來陸續御望ノ諸君アルモ部數限リアリ業既ニ終リシヲ以テ貴望ニ應スルコアタハズ是レ當書房ノ遺憾ニタヘザル所ナリ因テ今回猶一層ノ奮勵ヲ起シ校正ヲ嚴密ニシ印刷ニ注意ヲ加ヘ見本ノ如ク良紙ヲ用ヒ製本ハ極メテ美ヲ盡シ古來未曾有特別無類廉價ヲ以テ二千部ヲ限リ豫約シ諸君ノ欠望ヲ補ハントス乞此擧ヲ賛成セラレ速ニ御加盟アランヿヲ●拾部以上御申込ノ諸君ニ限リ別段割引御相談ニ應ズ●見本並ニ方法書ハ郵券二錢封入御申越アラバ呈ス

東京日本橋區馬喰町二丁目一番地
興文社
石川治兵衛

婦女改良家諸君に告ぐ

弊社今般同志と相謀り前途日本婦人の改良に從事せんと欲し玆に第一着として先づ女學雜誌の改良を行ひ次で婦女立志編女子教育論等苟も婦女子よ裨益ありと認むる書籍は續々出板して大に脂粉社會の元氣を振起せしめ他日賢母良妻も我日本婦人の異稱の如くあらしめんことを期す是れ我徒の誓て其責に當らんと欲する所なり請ふ冀くは世の婦女改良よ熱心なる諸君子も勿論紅顏細腰の女丈夫諸裙も奮然立て我徒の微志を翼成せしめんことを是れ我徒の敢て懇望する所を持たず諸裙自ら發奮せざる可らざる所ならぞや

東京本郷弓町壹丁目廿番地
女學雜誌社
社員一同啓告

女學雜誌花客諸裙に告ぐ

女學雜誌第十一号（十二月廿日出板）より愈よく紙面体裁の改良を行ひ紙幅を擴げ字數を増し益〻以て完全なる女學雜誌と爲さんとす舊來の花客諸裙は不相變御贊成御愛讀の程偏よ奉希上候以上

明治十八年
女學雜誌社編輯部

女學雜誌第一号より十冊前金にて御注文の諸裙は第二回の前金（第十一号より第二十号まで）至急に御拂込み可被下候但し府内は十一号より無遞送料にて配達可仕候間前金領收人罷出候節も郵稅御引去り（十冊前金三拾八錢廿冊同七拾錢卅冊同壹圓）御拂渡し可被下候以上

十二月八日
女學雜誌社會計部

本郷弓町壹丁目廿番地へ轉居す
近藤淡水

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌改良ニ並移轉廣告

女學雜誌ハ去る七月初号發行以來非常に江湖の愛顧を辱し第一号ハ三板第二号より第四号まで再板仕候幸榮を得て目下毎号二千五百部宛を印刷仕の場合に立至り感謝ニ堪へず候就ては今回愈よ〳〵事業を擴張し益〻〳〵發行の主旨を貫轍せんと欲し玆ニ獨立の一社とし紙幅を廣げ字數を增し一層記事を精撰して毎月三回(五日十五日廿五日)とあし暫て婦女子の改良を圖らんとに第十一号(改良雜誌)の發行へ來る廿日に在り新舊の看客諸君ハ何卒一層御贊成被下度社員一同伏して奉希上候以上

發行所 東京本鄕弓町壹丁目廿番地 本局 女學雜誌社

大賣捌 東京芝西久保櫻川町八番地 支局 萬春堂

今回事業擴張に付本局を前書之處へ設立仕候お付萬春堂ハ支局となし大賣捌仕候間看客の御都合次第にて本支兩局何れへなりとも續々御注文可被下候

女學雜誌合本

洋裝美本自第一号至第十号正價郵稅共前金五拾錢

右今般出來仕候ニ付續々御注文可被下候

文學叢誌本局
女學雜誌支局
萬春堂

過日本會第二次出品會相開候處內外紳士貴婦人陸續御光來夥多ノ出品物御購求被成下諸事望外ノ好都合ニ相運本會ノ光榮不過之候尤第二次出品會結末ノ詳細ハ不日報告可致筈ニ候得共不取敢大方慈善家ニ向ヒ聊謝意ヲ表シ候謹告

婦人慈善會

哲學叢誌

釋門 毎月一回 廿日發兌

○第拾壹號目次 「論叢」○淨住子淨行法門○光明流轉生死ノ根源○笞湯進之書○受戒法要「史談」○與敎大師傳○荊山居士傳「雜記」○修驗傳略○鎌倉將軍家公ニ上ッル返事ノ手簡○世道二福「詞叢」度三僧於天下一詔○造二興福寺一詔○賜二弘法大師一御製詩一首○山寺詩一首○色不異空空不異色ノ意ヲ詠ル和歌一首○和歌二首「問答」○業報ノ答○因緣造化ノ答○四諦十二因緣ノ問○衆生恩ノ問以上

發行所 東京南鍋町壹丁目 鴻盟社

東京芝區西ノ久保櫻川町八番地
發行所 萬春堂
持主兼印刷人 大庭宗吉
編輯人 近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區雉子町 團々社
同日本橋區新葭町 良明堂
同日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同京橋區木挽町一丁目 萬字堂
同京橋區銀座二丁目 山口福松
同牛込區肴町 活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目 石版社
岐阜縣美濃國笹土居町 星菱書房
越後國長岡 大橋書房
大坂備後町四丁目 岡島支店
大坂西區江戸堀南通一丁目 旭香舍

東京神田區淡路町 大賣捌 巖々堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY